

当時私は、女高師（女子高等師範学校）の1期生でした。入学したのは80人ぐらいだったと思います。

8月6日の当日、ちょうど月曜日の1講目は、校長先生のお話だったので、広い部屋で、80人集まっていなかったと思いますが、先生をお待ちしていたら、ピカッと光りました。私たちがいた教室は木造校舎の2階でかなり広い部屋でした。光って、騒々しいなと思う間もなく、もうペしゃっと埋まっていました。

次に気がついた時は暗い中にいました。じっと考えたら、やっぱり爆弾だったのかなというぐらいで、とにかくここをなんとかして出なければいけないと思いました。

まず、自分の靴をちゃんと履いているかどうか探して両足に履いて、どういうふうに抜け出たか覚えていませんが、ちょっと高いところへ上がってみると、惨たんたるありさまでした。みんな、うろうろしていますし、出てこられる人は出てきて、私はだいぶ苦勞して地面に下りたと思います。

運動場の隅に、看護婦さん、今でいえば学校の保健室の先生がいました。校長先生は、だいぶおけがをされていました。爆弾というのは分かるのですが、本当に何が起こったのかという思いでした。教室内に集まっていた生徒さんで爆心地側の方は、ちょうど向かって右側がやけどの方が多かったです。私は真ん中の列で、傷だけで済んだのだと思います。

付属（高等女学校）の生徒さんは、建物疎開（空襲による延焼を防ぐために建物を壊して空き地を作る作業）みたいなものに行っていて、本当に水ぶくれの生徒さんが、たくさん帰って来られました。

服とかは、一応、まとっている人もいるし、ちぎれている人も。でも裸というのは、私は見ていません。よく丸木位里さんの絵（「原爆の図」）に、皮膚がだ一っと下がったようなのを描いておられますが、そのような姿は見ませんでした。

爆心地の方角からけがをされた方とか、どんどん逃げて帰られて本当にびっくりしました。自分がけがをしていることにやっと気がついたのですが、頭をかなり強く打っていて、手をやるのも怖いぐらいでした。とにかくなんとかどうかしないと考えていたら、看護婦さんが、「ちょっと頭に巻いてあげるわ」と言って、包帯を巻いてもらいました。

隣に日赤（赤十字病院）がありましたので、一生懸命助けておられました。日赤病院へ向いて行ってもだめだから、私は県病院のほうへ行ったら、治療をしてもらえるかもしれないと思って、友人と2人で、道路に折り重なっているがれきをかきわけながら、川べりの道を御幸橋のほうへ歩いて行きました。

御幸橋のところへ来ましたら、軍のトラックだったのか、よく覚えていないのですが、トラックが運んでくれるというので、どこへ行くか分からなかったのですが、一緒に乗せてもらって、宇品へ着きました。そこでしばらく待っていたら、小さな船で「似島（にのしま）へ連れていくから」ということで、似島へ渡りました。私は、あまり惨状を見たくないほうで、なるべく見ないようにしていたのですが、その土地も、きっといろんな方がおられたと思います。

とにかく似島へ渡って、そこではけがをされた方とか大変な人が待っていました。私たちの、これぐらいの傷では、「診てもらうのは悪いから、あとにしよう」と言って、友人とじっと待っていました。次から次へと医務室へ運ばれて、いろんな処置を受けておられましたが、結局私が診ていただいたのは、船で渡ってくる人が無くなった夜中になっていました。麻酔も何もなくて、クレゾールの液をかけられて、「縫うぞ」と、ぐさっと縫われたのは覚えています。でも、かえって、頭がしゃんとしました。その日、広島のはうは、真っ赤に燃え上がっていました。あの火の光は忘れられません。

家族のことは、どうしているかなと思うところですが、私にしてみたら、それどころじゃありませんでした。母と小さい弟、妹は疎開しているから大丈夫でしたが、父と妹が女学校へ行っていたので、どうなったか、ちらっと頭をかすめたのですが、ただとにかく、もんもんとその日は過ごしていました。あとから聞いた話ですが、似島でも穴を掘って、どんどん遺体を埋めていたようですが、そこは見えておりません。

私の頭のけがは、太い梁（はり）か何かが落ちて、当たって裂けたのではないのでしょうか。いまだに傷は自分でも見ていませんが、かぎの手になっているみたいです。結局、年の暮れまでは包帯が取れませんでした。

似島で手当てを受けた翌日になって、お昼ぐらいに、付属女学校の先生が、生徒さんを捜しに似島へ来られたので、その先生にお願いして、「学校へ連れて帰っていただけませんか」と言って申し出ましたら、まだあの日は、軍隊はしっかりしていたと思います。「身元を、しっかりした引受人がいないと返さない」と言われました。「実はこうこうで、先生がおいでになったので、一緒に帰らせてもらいます」と言って、それで宇品へ渡って、そこから歩いたと思うのですけれど一応学校へ戻りました。

その宇品へ戻る途中に、私は江波（中区）に家があったものですから、左に目をやると、燃えていなかったのも、ああ、家は残っているなという確信だけはありました。だから、学校へ着いて、「家はありそうです」とお話ししたら、「お父さんが捜しに見えましたよ」と言われました。父は、6日に私と妹を捜しに行ったのだと思います。妹は爆心地にある学校だったので、未

だに行方は分かりません。父は大丈夫だったと思って、そこだけは確かめて学校をあとにして、江波まで帰りました。

もちろん、家はだいぶ壊れていました。そのままそこへ居着くかと思いましたが、親戚のおばさんを、水内村（現・広島市佐伯区）へ連れていこうとなって、大八車（リヤカー）に乗せて、おじさんと、親戚2人ぐらいの方と、押しながら、ずっと40キロの道を一晩以上かけて、8日の朝10時ぐらいにやっとたどり着きました。

そこからあとは、全然覚えていなくて、その日も、丸一日寝ていたみたいです。だから、せっかく縫ってもらった傷も、膿んでしまって何にもなりませんでした。やっと小さなお医者さんへ行って、膿の始末だけはしてもらいました。

原爆投下当日の8月6日から8日まで、私が覚えていますのはそういう状況でした。